

■ ジャワハルラル・ネルー生誕百年記念表彰（インド国民科学協会）における講演から

地球社会への移行

二〇〇一年から始まる一千年にふさわしい法ダールマを求めて

カラン・シン



人類史上、まれに見る時代が到来している。古い時代が終わり、新しい時代が近づいていることは誰にも明白である。我々は、崩れ去る過去と、定まらぬ未来との狭間で、バランスをとりつつ立っている。既存の指標がひとつ、またひとつと消え去って行くのを見ながら、水平線上のあらゆる方向に無限にひろがる大海に漂っているような感覚におそわれている。

確かに、人類が生き延びるためには、通常の連続の結果として生ずる進展だけでなく、意識における質的飛躍が必要であり、既成概念の再構成だけでなく、認識にお

けるパラダイム（規範）の根本的変更が必要なのである。人類は、今、本質的な岐路に立たされている。かつて、この地球上で長い、苦しい歴史を綴りながら、様々な大変動を経験してきたが、これほどまでに重大で困難な大変動に直面したことはない。

このような地球社会全体の大変動は、かつてなかった。この大事件はあまりにも身近に迫りすぎて、我々はその途方もない重大さを正しく把握することができないのかもしれない。しかしそれを示す徴候は極めてはっきりした形で現れている。

この五十年間の急激な科学技術の進歩によって、地球上の生活は、あらゆる面で一つの社会へと収斂していく過程にある。このことは、身近な現象を少しでも観察してみれば容易に分かることである。

かつて、トーマス・マンは、「人類が政治に引きもどされるのが、この時代の宿命である」と語った。政治活動は、公共生活の様々な側面の中でも、最も顕著なものの一つであろう。そして、ウェストファリア条約にその原形を見せる、現在の国家 (nation state) が、過去数世紀にわたり人類史の主流であった。しかしながら、現在では、その国民国家自体が相反する二つの力によって解体されつつあるのである。

つまり一方では、民族主義は超克されつつあるのである。その最も劇的な例が欧州統合への動きである。この動きは驚嘆に値すると言っても過言ではない。過去、欧州諸国は何世紀にもわたって激しい戦いを繰り返し、その覇権争いが、何度も世界を残酷の限りを尽くした戦争に引きずり込んで来た。しかし、今や過去何世代にもわたる憎悪を克服して、様々な検討すべき問題は残しつつも、

つも、純粋な意味での「経済的な生き残り」という論理にせかされつつ、一つの経済単位へ、究極的には政治統合へと向かっているのである。

他の地域のグループ化もゆつくりとはあるが、同じ方向に向かっている。S.A.A.R.C. (南アジア地域協力連合) も恐らく同じ道をたどるであろう。

したがって、現在、二百ほどの国家が混沌とした状態で存在しているが、ここ数十年の内に、十とか十二といった地域グループにまとまっていくことも考えられるのである。さらに、これらの地域グループが統合されていけば、二十一世紀の終りまでには、テニスンが「人類の議会——世界連邦」といみじくも述べたような連合体へと結実し、「合一の新しい精神が人類全体を包含するであろう」と、一九四七年八月十五日にシュリー・オーロ・ビンダが述べた展望を具体化することになるかもしれない (訳注 この日はオーロ・ビンダの七十五歳の誕生日であり、またインドが独立した日であった)。

さて、もう一つの力は、東欧と中欧における民族国家、あるいは表現を変えれば、マルクス・レーニン主義の独

裁体制によって人工的に構築された体制を解体しつつある。それは、自分たちの民族と宗教のアイデンティティを主張しようとする動きである。

旧ソ連邦が内部から音を立てて崩壊していったことは、実に特筆すべきことである。なぜなら、それは冷戦という歪んだ二極構造によって地球社会形成への必然の流れを塞ぎ止めていた体制を粉微塵に打ち砕いたからである。

もし、この体制が続いていたならば、社会の発展は凍結され、政治的進歩を生み出す力も動きを止められたままとなっていたであろう。大統領としての地位を失うことになろうとも、強力な民主化への力を開放したミハイル・ゴルバチョフの功績は、人類史上にその名を不朽のものとして残すことになった。共産主義の終焉は、実はポスト・モダン (脱近代) の歴史の「始まり」であり、一部の人が指摘するような歴史の終りではないのである。

ユーゴスラビアの解体は、規模としては小さなものであるが、はるかにむごたらしく、凄惨な状態にある。そ

して、一民族からなる真正の国民国家自体が危機に直面すれば、多民族からなる人工的な連邦国家が生き残れる可能性はほとんど期待出来ないという教訓を残した。

話は一九六七年にさかのぼるが、私は、たまたま、当時のチトー大統領のインド訪問に同行し、インド各地を旅行する機会に恵まれた。大統領との会話の中で、私は質問した。ユーゴスラビアの憲法は余りに連邦主義的色彩が強いのではないか、そして、彼の死後、国家は解体するのではないか、との疑問をぶつけてみたのであるが、彼の答えは、よどみなく、「私の死後、各共和国が解体の道を選ぶなら、そうさせよう」というものであった。

ユーゴスラビアの建国の父は、連邦の解体がいかに血なまぐさいものであるかということまでは予見できなかったが、連邦制というこの実験が、限られた期間しか続かないことについては、よく理解していた。

しかし、つきつめて考えれば、共産主義が崩壊して、旧ソ連邦やユーゴスラビアが解体したことが、一つの地球社会への移行という流れと矛盾するものではないことは明らかである。

現在起きていることは、長い間共産主義イデオロギーの支配下にあった各民族が、民族主義を克服する前段階の試行錯誤をする期間を必要としていることを示している。したがって、共産主義は、地球社会への移行をせいで遅らせるということはあっても、長期的に見れば、地球社会への移行の流れを逆戻りさせることはできなかったのである。

政治は、地球社会へ移行する途中の段階にあるとしても、経済活動の方は、ずっと以前から、国境を越えて展開されている。経済と金融の分野での意志決定が、地球規模で人類に大きな影響を与えている。特に多国企業業の台頭は、地球社会形成への強力な推進力となっているが、これによって、国家間の壁は急速に崩されていくであろう。

経済上のやむをえない事情から、西欧諸国は統合への道を歩んできたのであるが、このような傾向が他の地域にも波及していくのは避けられないであろう。

気の遠くなるほど長期にわたった「ウルグアイ・ラウンド」交渉を経て、GATT(関税と貿易に関する一般協定)

加盟国による新たな合意が成立し、世界銀行と国際通貨基金は、レーガン元大統領がかつて「市場の魔術」と呼んだ、自由な貿易体制の実現を誇らしげに宣伝している。

その魔術が白とでるか黒とでるかかは、もちろん、経済の内実いかによるのであるが、ともかくも、これまで述べて来た観点から見れば、世界経済という枠組みの中では、国境はますますその重要性を失い、こういった流れが、地球社会実現に向けての強力な推進力として作用していくことは明白なのである。

環境問題は、当然のことながら、地球規模の問題である。一九九二年、リオデジャネイロで開催された歴史的意義を持つ国連環境開発会議(地球サミット)は、この事実をきわ立たせる会議であった。

これに先立つ二十年前、わずか二人の首脳——主催国スウェーデンのオロフ・バルメ首相とわが国のインディラ・ガンジー首相——しか出席しなかったストックホルム会議(国連人間環境会議)から思えば、二十年後の今日、地球の温暖化、オゾン層の破壊、川と海の汚染、二酸化炭素の排出問題、生物多様性保存の問題、森林の喪失と

砂漠化などの問題を一部の地域だけで解決することはできないという認識が、完全に普及したのである。

このような認識に促され、リオでの地球サミットには、世界から百を越える国家・政府の首脳の参加を見たのである。環境問題とその解決のためには、地球的視野をもって取り組まなければならないという共通認識が出来てきている事実こそは、一つの地球社会が急速に形成されつつあるという、目に見える確かな現実の証拠なのである。

全世界の様々な緑を守る運動や環境保護運動にたずさわる人たちは、ある意味では地球社会へと意識を変革していく先駆者であろう。ほんの二十年前においてすら、一風変わった、異端的な運動とみなされていたものが、舞台の中央に踊り出て来た故に、世界各国の政府は彼等の主張も考慮にいれざるを得なくなってきたのである。

この地球という惑星を全体で一個の生命体と考え、太古のカオスの大海から今日ある有情なるものにまで育んできた母——これをギリシャの伝統では *Gaia* (大地の女神) と言ひ、ヒンズーの伝統では *bhuvānīśasundhārā* (生

き物の土地) という——と考えれば、確かに、このような思想は、地球社会実現への大きな力となっている。

宇宙から撮影された地球という惑星の比類なき美しさは、目覚めゆく地球主義の象徴となり得るものである。それは、初めて鏡に映った自分の顔を見るようなものである。我々の惑星地球は、まさしくその写真のまま、無限の外界の宇宙の中にあつて、一つの小さな点のごとき光と生命のきらめきを見せ、あまりにも美しく、こわれやすい。

地球社会の実現を促進するものの中で、最も強力なもの、宇宙探検と衛星を活用する技術の開発による多様な通信の分野の革命であろう。

ユージン・ガガーリンが初めて宇宙という障壁を破り、ニール・アームストロングが月面に人類の第一歩をのしとったとき、彼らは、まったく新しい方向を人類史という地図の中に書き込んだのである。科学技術によって達成された偉業は、世界を震撼させるのに十分であった。

スタンレイ・キューブリックの傑作である『二〇〇一年宇宙の旅』に劇的に描かれているように、この地球と

いう惑星の一生物が、洞穴での生活から宇宙ステーションに至るまでの驚くべき大転換を十万年足らずの間に成し遂げたことは、驚嘆に値する。

人工衛星による宇宙探検によって、様々な応用技術がもたらされたが、最も重要なものはラジオと、さらに劇的には、テレビなどのコミュニケーションの分野である。最近のケーブル通信ネットワークの発達によって、世界の広範囲の地域において、人間の意識の変容が起きている。

たとえば、世界の各地に散在する何百万人という人々が、同時に同じ番組や事件を目撃することが可能になった。地球全体がこれほどまでに意識を一つの事に注ぐような状況は、歴史上かつてなかったことであるが、その影響については、現在のところ予測不可能である。

テレビがもたらす文化面での影響にも多大なものがある。人類史上初めて、英語という世界言語が出現した。これは、世界文明の成立に不可欠な要素である。英語が他の言語に取って替わっているわけではなく、英語は世界の様々な言語・民族をつなぐ共通語としての地位を急

速に獲得しつつある、ということである。

同様にロック・ミュージックも、初めての真の世界音楽として出現してきた。ニューヨーク、ニューデリー、ボンベイ、北京、レイキャビーク、リオデジャネイロ、どこであろうと、若者たちが同じビートで踊っている。同じく、ジーンズは、世界の若者に共通なユニフォームとなり、コーラは世界の清涼飲料になっている。

むしろ、これらの現象は価値判断を伴うものではない。数多くの人々が、今後ともビートルズよりもベートルベンを好み、コーラよりもシャンペンを愛飲するということはあるだろう。要するに、音楽であれ、清涼飲料であれ、人気のあるブランドが、大衆に影響を与えながら、急速に全世界に広がり、地球社会実現の基盤を形成していることは間違いない。

国境と言語の障壁を突き崩す、もう一つの強力な影響力を持っているのが、ジェット機時代の旅行である。年間の総売上高で石油産業や兵器産業さえも陵駕する、世界最大の産業とも言うべき旅行業は、今や、毎年海外を訪れる数百万の人々をも顧客とした。

工業技術の奇跡的な革新がそのものであるジェット旅客機の開発によって、大量の旅行者の輸送が可能になり、異なる人種・宗教・言語・民族の人々を、人類がいまだかつて経験したことのない形で、結びつけることになったのである。

例えば、最近中国の万里の長城を訪れたとき、我々は、少なくとも十二ヶ国からの観光客と出会ったが、その人々は、それぞれ全く分らないそれぞれの言語を話していた。タージ・マハールや自由の女神を見物しに行っても、同様の体験をすることは間違いないであろう。

地球上を縦横に行き交う旅行者たちは、いわば、この地球という惑星に急速に普及しつつある地球意識という新しい織物でできた服の縦糸と横糸である。

今までに述べたすべてのことがらが、未曾有の、後もどりが出来ない地球社会実現への流れをつくっているのである。この流れが、善かれ悪かれ、容赦なくこの地球に住む人々に影響を与えていく。

楽観的な予測は、大きく揺さぶられ、その根拠を問われている。我々は大変動の嵐に見舞われ、いや応なしに

一つの地球文明へと押しやられている自分たちに気付くのである。かつて人類は、長い歴史の中で、幾多の変化を経験してきたが、地球社会への変化の流れは時間の流れの速さという点で、これまでの変化とは異なりユニークなものである。

かつて、社会の変化は何世代にもわたる、長い時間の間に起きたものであったが、今起きている変化は、時間自体が圧縮されている。その結果、アルビン・トフラーが「未来の衝撃」(future shock)と呼んだ現象が一般化している。

我々の惑星地球に大変動をもたらしている衝撃的な変化のほとんどすべてが、ここ五十年の間に起きているということとは、驚嘆に値する。五十年という時期は、今の地上に生存しているほんの二世世代の人々の記憶の範囲に収まる長さなのである。

原子力やジェット機による輸送、テレビやコンピュータの普及、ロボット工学や臓器移植、衛星を使った通信技術や宇宙旅行、遺伝子工学やサイバネティクス、そして、更に、多くの革命的な科学技術上の発展が、我々

自身が生きている間に行われたのである。

あまりにも急激な変化であるために、多くの人々は、呆然として、何をしたいのか訳が分からなくなっている。

地球社会が、その大変革のおびただしい徴候を示しつつ、急速にその全貌を現しているのとは対照的に、その一方では、地球社会の前段階に凍結されたままの発想しか出来ない何百万という人々が存在している。この「時差」の存在こそ、今日の世界を、奇妙なまでにどっちつかずの不安定な状態に追いやっている主たる原因なのである。このような世界においては、相矛盾する運動と勢力が同時に現出してくるという驚くべき現象が見られる。

世界化を指向する徴候のすべてが、前向きなものでないことは明らかである。

世界化それ自体が、もともとの変化を増幅するので、もし、その変化が悪い変化であれば、より悪質なものとなって全世界に広がることになる。テロ活動が地球的規模に拡大し、テロリスト・グループが核兵器を入手し、

悪意をもって使用する可能性が出てくる。それはまさに悪夢であろう。

麻薬の取引は、社会の基盤そのものを脅かすまでになっていて、少なくとも二つの国においては、国家そのものの存在が脅威にさらされている。莫大な利益を生む麻薬取引は、中毒患者と麻薬犯罪を急増させ、邪悪な裏の世界を代表するものであるが、絢爛豪華な西洋文明の「陰」の部分を作っている。麻薬犯罪の世界化は、容赦なくその触手を伸ばし、発展途上国の社会を侵蝕している。

個人、集団を問わず、暴力は、全世界的に広がっている。テレビは、確かに一面では素晴らしい効用があるにしても、しばしば、ぞっとするような暴力と恐怖を伝える媒体となる。しかも世界中の何千万という家庭に放映されているのである。

テレビ画面に映される映画の暴力場面には、悪に対する自虐的なアプローチは言うに及ばず、凶悪、恐怖、その他の人間の精神をおとしめる、ありとあらゆるものが出てくるので、全世界の人々の精神の健全さと平衡感覚を

著しく損ない、重大な脅威となっている。

長期的に見て、このような映像が若者にどのような影響を及ぼすかは即断できない。しかし、これが、世界化に向かう大変動がもたらす重大な影響のマイナス面であることは明らかである。

世界的に広がっているエイズ（後天性免疫不全症候群）は、この十年間で本格的な取組みが必要な段階に入っており、国籍、宗教、性別、性的嗜好といった差異を越え、すべての大陸において爆発的な流行を見せている。

現在の予測が信頼できるものとすれば、今世紀の終りまでに、地球上で数千万人がHIV（ヒト免疫不全ウイルス）に感染し、それが原因で、毎年数百万人が死ぬことになる。アフリカの何ヶ国かは、人口の約三分の一を失い、その結果、国家の生産能力が著しく損なわれ、経済発展のための計画が挫折する恐れがあると危惧されているほどである。

エイズが人類にもたらした肉体・精神両面にわたる激しい苦悩は、実に、世界全体に課せられた悲劇の重荷である。

過去数十年で性に対する社会通念は、大きく変わったが、性行動の中でも、特に顕著になってきたのが、西洋社会に大きく広がっている性的放縦である。これも、世界化の波に乗って、ポルノ・ビデオが家庭に侵入するという形で世界に蔓延してきている。インドにも、確かに、「カーマ・スートラ」のような性典は存在するが、その行為そのものは、プライベートになされるべきものであり、裸体を一般向けのテレビ画面に写し出すといったものとは全くその性質を異にしている。

以上のように、世界化の流れは後もどりさせることは出来ない。それには、歓迎すべき側面も数多くあるが、同時に警戒すべき危険な暗黒の側面もある。

この負の側面を克服出来る積極的な意識を啓発しなければ、世界化への移行そのものが挫折し、結局、人類は、自滅への道をたどることになりかねないのである。

世界化への移行と、それに伴う変化について、思いをめぐらせば、地球の世界化という現在のシナリオを、蝶の幼虫が蛹になる時期にたとえることが出来るであろう。蛹の時期は、快いものではないであろう。恐ろしい

までの圧迫感と危機感に囚われるであろう。しかし、この苦しみの時期をくぐり抜ければ、地を這う一匹の醜い虫は、美しく、色どり鮮やかな蝶に変身し、虚空を自在に飛び回るようになり、もはや、葉の上をのたうちまわることもない。

世界化への移行が大過なく実現され、人類の意識にこのような変革が起こることを切に望むものである。

史上最悪の暴力と残虐に満ちた今世紀も、急速にその終焉に向かいつつあるが、今、人類が直面している最重要の課題とは、その全貌を現しつつある地球社会を支えるだけの「意識」を、いかにして醸成していくかということである。

我々が必要としているのは、地球全体を包括する、思想的パラダイムとしての「法」である。この「法」の強調するところは、競争ではなく協力を、紛争ではなく収束を、快楽主義ではなく全体観を、である。この「法」を追求するために、我々は、人類の偉大な精神的遺産にその源泉を求めることができる。そこで、私は、その例として世界的に高い水準にある哲学の一つ、ヴェー

ダーンダ哲学の普遍的概念について、手短かに論じてみたい。

破壊され、粉々になった現代人の認識に取って替わるだけの、全体観に立つ思想的パラダイムが提供可能であろうウパニシャッド哲学から、五項目にわたって、基本的な概念を提示したい。

まず、「すべてには神性が浸透している (isa vaśyam idam sarvam yat kin ca jagatvam jagat)」という最も基本的な概念である。イーシャーヴァースヤ・ウパニシャッドのこの冒頭の一行は、一片の塵にすぎない地球と呼ばれるこの惑星のみならず、際限無き宇宙（これをウパニシャッドでは「無数の梵卵」[anantakoṭi brahmāṇḍa]と呼んでいる）の中に存在する何億兆という銀河群に至るまでの全宇宙に、「神性」が浸透していると説いている。

いずこであれ、事物が顕現するところには、「神性」が現れているのである。これは、現代の諸科学者たちの追究する、統一場理論——一つの理論で全ての現象を説明する——とも哲学的関連を持つものである。

第二番目の概念は、すべてに「神性」が浸透している

ならば、各個人の心の中にもそれは存在している、ということである。

「すべての人の心に内在する神性は、隠されてはいるが、発見することができるものである (īśvaraḥ sarvabhūtānāṃ hiddeṣe tisthati Bhagavad-gītā 18, 61)」。

この概念は、とりもなおさず、その意識の中に「神性」の輝きを秘める一人一人の個人に尊厳を与える根拠となるものであろう。ウパニシャッド文献の中に、人間を意味する素晴らしい言葉である「不滅なるものの子供たち (amṛtasya putrah)」という表現がある。

人間は、自らの運命にも言わないロボットやあやつり人形のような偶然的産物ではなく、「不滅なるものの子供たち」なのである。

この概念には、ある意味で民主主義の基盤となるべき考え方が含まれている。なぜなら、すべての個人は、少なくとも理論上は、個人がそれ以下の単位には分割できない存在であるということから、認められ、尊重され、そして、その個人によってのみ政治組織も成立可能となるからである。

この概念は、カーストや信条、性別や宗教、経済的立場や国籍・民族の違いによる障壁を超越するものである。ヴェーダーンタ哲学は、選ばれた人種、選ばれた人々、選ばれた性、選ばれた国家といった考え方をとるものでは決していない。全人類を対象とし、あらゆる個人に「神性」が内在しているとする偉大な原理を我々の前に提示しているのである。

第三番目の概念は、あらゆる個人に「神性」が内在しているのであれば、人類の歴史が始まって以来のすべての争いや悲惨な出来事にもかかわらず、本質的には、人類はすべて広い意味で一つの大家族である、という考え方である。

インドの国会の入りの門には、次のような見事な詩文が彫り込まれている。

「これは我、それは彼、という物の見方は、未だ、卑少で、狭量な物の見方である。気高い心を持つ者たちから見れば、世界は一つの家族である。」

(ayam nijaḥ paro veī gaṇaṇaṃ laghucetasam
udārcaritaṇaṃ tu vasudhaiva kuṁbhakam)]

(訳注 出典は Bhāgavata-Purāṇa 等)

この中の「世界は一つの家族である (vasudhaiva kutumbakam)」という一節は、今その形を現しつつある新たな地球社会のモットーとなりうる言葉である。

徒歩で一日数マイル以上の移動が不可能であった何千年も前に、ウパニシャッドの先哲たちは、地球社会の精神的支柱となるべき、全人類を一家族と見る本質的な一体観をすでに持っていたのである。

第四番目の概念は、すべての宗教の本質的一体性である。よく引用される「リグ・ヴェーダ」の一詩節(Ⅱ・164・55・6)に、「真理は一つ。賢人たちは、それを多くの名で語りなす (ekam sadviprā bahudhā vadanti)」とある。

また、「ムンダカ・ウパニシャッド」の中の詩節には次のようにある。

「河川が世界の様々な場所から源を発するが、最後には、同じ大海に流れ込んでいくように、人類のあらゆる信条や宗教も様々に成立してきたものであるが、究極的には同じ到達点に至る。

(yathā nadyah syandamānāḥ samudre astam gacchanti

nāmāṇe vihāya
tathā vidvān nāmāṇād vimuktāḥ parāṁ param puruṣam up-
eti diyaṁ)」

ヒンズー教は、雪深いヒマラヤ山中で生まれた。イスラム教はサウジアラビアの灼熱の砂漠で生まれた。その他の宗教も、様々な異なる場所、時代、また異なる経済・社会・政治状況の中で生まれてきた。しかし、一つの宗教上の「普遍的な」「神性」があれば、たまたま、異なる宗教の伝統の中で暮らして来た人々にとっても、究極的にその神格が、異なったものになることはないはずである。

「神性」から発する無限の光彩が、実に様々な現れ方をすることは確かである。この慎ましやかな惑星の住人である我々人間が、「神性」は、特定の時代に特定の形態をとってしか出現しない、と主張すれば、それは傲慢 (ahankāra) の極みではないだろうか。確かに、「神性」の現れた個々の姿・形には、それ自体の妥当性があり、いかなるものであれ、特定の宗教形態を悪くいう意図は全く無いし、「神性」に至る多くの道があることも確か

である。

偉大な伝統を誇る世界的大宗教が、圧倒的な影響を及ぼした天啓と靈感を体現しているとしても、すべての精神的真理を独占することはできるものではない。従って、個人に内在する「神性」が民主主義を支える基盤をなしているのと同様に、すべての宗教は本質的には一つのものであるという考え方は、宗教の多元的共存と世界的な宗教間協力運動の基調となる概念である。

すべての宗教に共通する要素は、個人を「神性」へと近づける力が存在することである。この力が存在する限り、いかなる宗教を信奉しようと何ら問題はない。ヴェーダーンタ哲学は、現存する宗教に取って替わろうとするのではなくて、世界の多様な宗教伝統を見える、まったく新しいパラダイムを提供するものである。まっ

すべての宗教が、独自性を保ちつつ存続していくことは当然のこととして、ヴェーダーンタ哲学が示唆することは、そのようなすべての宗教が、「神性」を具現化するための方法論として尊重され、敬われるべきものであり、互いに敵対すべき存在ではないということである。

このことが実現できれば、調和ある地球社会の建設に向かって、大きく前進することができよう。

ヴェーダーンタ哲学の第五番目の概念として、本日、私が皆様に申し上げたいのは、「多数の人々の繁栄と幸福 (Bhujanasukhāya bahujanahitāya ca)」ということである。ヴェーダーンタ哲学は、個人の救済のみに関心を示し、貧困、病気、現実世界の様々な問題に対しては十分な関心を払わない、本質的に利己的な哲学である、という誤った見方があるが、これは正しくない。

聖典「リグ・ヴェーダ」は、我々に人生の目的が二つあることを指し示している。

「個人の魂の救済と世界の繁栄 (ātmano mokṣārtham jagat hitāya ca)」である。

この点を常に強調していたのがスヴァーミー・ヴィヴェーカーナンダであった。「清貧の神」(dharma nityāna)と彼が命名した奉仕活動は、困っている人を助けても、感謝されることを期待せず、むしろ逆に、その人のお陰で、奉仕活動を行うことができたことに感謝することを説く。さらに、彼は、飢えている人に宗教を説くことは

侮辱である、とも述べている。

以上述べてきたように、ヴェーダーンタ哲学に社会的な意識が欠如しているのではなく、むしろ逆に、そのような意識が教えの神髄なのである。

その理由は、このような社会意識が出てくるものとなる理論に従えば、すべての人に「神性」が浸透しているのであるから、同胞たる人間に奉仕することは、とりもなおさず、神に奉仕することになるからである。

以上の五項目の内容は、普遍的な意味をもっている。これらと類似した概念を他の大宗教の伝統から探していくことはできるだろうが、ヴェーダーンタ哲学に極めて明快に述べられているこれらの概念は、今日的意義という点から見ても素晴らしく、二十一世紀から始まる新たな一千年に向けての卓越した法^{ダーム}を提供していると言える。

話を締めくくるにあたって、私をジャワハル・ネルー生誕百年記念表彰の受賞者として選んで下さったP・N・シュリーヴァスタヴァ教授をはじめインド国民

科学会議の会員の皆様に感謝申し上げます。

この賞金は、オクラで障害のある子供達のために優れたセンターを運営している、精神障害児福祉デリー協会 (the Delhi Society for the Welfare of Mentally Retarded Children) に寄付されることになっている。

ジャワハル・ネルーは、数十年にわたって、わが国の政治と知性の分野における卓越した中心的人物として活躍し、インド独立後の十七年間、初代首相として政務をとり、政治の安定と社会変革と経済発展のための確固たる土台を築いたのである。

確かに、彼がこの世を去ってから、世界は大きく変化した。例えば、彼が社会主義と非同盟政策を説いたころの世界の情勢から見ると、現在の世界の状況は、考えられないほど大きく変化してしまっている。

それにもかかわらず、自由を求める運動とわが国が係わる対内・対外的な諸問題への展望を示した、その貢献は、現在においても重要な意味を持っている。また、今日のインドが直面する諸問題解決の糸口を得るためにも、彼の著作を学ぶことが重要である。

私事になるが、一九六七年、三十六歳のとき、閣僚の一人に指名された私は、デリーに來たのであったが、今では、この数字が逆になって、私は六十三歳である。

この間、国内、海外に活動の範囲を広げてきた。そして今私は、世界最大の民主主義国家の一市民であることに誇りを感じる。同時に、自分自身を一個の地球市民と考え、地球上のどの場所にあっても我が故郷のように感じるのである。

この感情こそが、ようやくその相貌を明らかにしつつある地球社会を根底から支える基盤となるべきものであるという確信を深くしている。

(カラン・シン／インドヒンズー教連盟総裁)

(訳／セッセン・インターナショナル)